

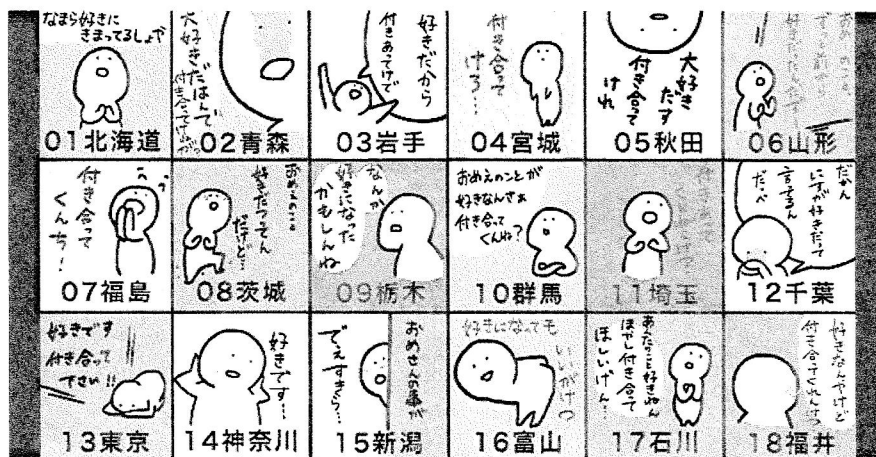
声を出して語るということ

顧問 高橋 実

『私は昔話が好きでなかった』私はなぜ、昔話が好きでなかったのか？その理由がわかったのだ。私は昔話の未来の姿で、出会うことができなかったのだ。つまり、子どもの頃だれかが声で語り、私の耳で聞き、心に届けてもらうことがなかった。私が子どもの頃、昔話を聞いていたら、きっと私は無条件で昔話が大好きになっていただろう。そして今、はっきりしたこと、私はなぜ昔話を語るのか？そして、いま生きる子ども達がかつての私のような子どもにならないように。祖先が育んできた大切なものを、再びよみがえらせて次の世代へつなげていきたい。切れかかった鎖は、私が語ることによって少し修復できるのだと信じて。

所属している「日本昔話学会」機関紙『昔話—研究と資料』46号に朽谷洋子さんという人がこう書いていた。おそらく語りの会の会員の多くがこうした朽谷さんのように、身近の誰かから耳で昔話を聞いたことがない人が多いだろう。昔話は記録された文字から入った人が多いのではないか。昔話は本来の姿は、文字から入るのではなく、耳からはいつてくるものなのだ。それを少しでも補えることの手助けが語りの基本ではなかろうか。

次に、語りは文字で書かれたものを丸暗記して語ればよいかというと、そこに語る人のイメージが入ってくる必要があると思う。自分の言葉で語る。聞く人は語る人の目を見る、声の大きさを聞き、顔の表情を見る。そして、その話の世界のイメージを膨らませる。そうしながら昔話の世界に入ってゆく。地元の生まれでないから、地元の方言で語れないという人がいる。東北出身なら東北弁でいいのだ、関西出身なら関西弁でいいのだと思う。わからない方言は解説をさしはさんでもよい。聞く人の脳裏にイメージが映ればいいのだ。耳を通して聴く生きた言葉がイメージを形成する。自分の言葉が聞く人にどんなイメージを与えるか、どのようにして聞き手に楽しんでもらえるかがまた語りのもう一つの基本であると思う。



(方言マップ)